

Japan Society of Island Studies

日本島嶼学会



Vol.81

NEWS LETTER

2026.3.20

Contents

2026 年度事業計画および暫定予算について	1
第 13 回（2026 年度）「日本島嶼学会賞」候補者募集について	4
2026 年度日本島嶼学会研究助成申請について	5
日本島嶼学会 2025 年度第 4 回理事会議事録	6
日本島嶼学会 2025 年度第 5 回理事会議事録	8
2026 年次「今治大会」のお知らせ（第 2 報）	9
熱帯生態学会大会（大阪大会）のお知らせ	9
「島の医療を考える研究会」のご案内	10
■ 新刊紹介：『溟北先生時代日記（永田俊一 著）』	11
■ 新刊紹介：『宮本常一と民俗学（森本孝 著）』	12
■ 新刊紹介：『リーディングス 外から見た奄美諸島—奄美のアイデンティティは何か （叶芳和著）』	14
■ 新刊紹介：『大正・昭和のたのしい旅行地図図鑑（岡田直 編著）』	16
カリブ海の孤島—セイバ島（長谷川秀樹）	19
会員の動向（2025 年 11 月～2026 年 3 月）	23

2026 年度事業計画および暫定予算について

2026 年 3 月 5 日に開催された理事会において承認された 2026 年度事業計画および暫定予算を以下にお示しします。ご意見のある方は 3 月 31 日（火）までに学会事務局 (yotsuka@cpi.kagoshima-u.ac.jp) 宛にメールでご連絡ください。

日本島嶼学会会長 小西 潤子

## 2026 年度暫定事業計画案

### 〈活動計画〉

理事会を適宜開催し、次の事業を実施するための必要事項を審議・決定する。

#### 1. 年次大会の開催

理事会での協議・決定を踏まえ、年次大会実行委員会を組織し、大会受け入れ団体等と協調しながら年次大会を開催する。

#### 2. 学会誌『島嶼研究』の刊行

本学会の基本事業として、投稿規程に基づき投稿された研究論文や資料等について、編集委員会に受理されたものを掲載する学会誌『島嶼研究』を刊行する。

#### 3. 『ニュースレター (JSIS Newsletter)』発行

『ニュースレター』には、総会・理事会・特別研究大会に関する報告のほか、島嶼に関する諸情報や会員の活動報告などを掲載する。電子版 (PDF) として、おおむね年に 3 回 (7 月、12 月、3 月) 発行する。また、学会ウェブサイト上で公開する。

#### 4. 学術交流の促進

日本学術会議登録団体として、学問の自由を尊重し、国際島嶼学会 (ISISA) はじめ国際小島嶼文化会議 (SICRI) や国際島嶼開発科学者会議 (INSULA)、熱帯生態学会などの関係学会等との学術交流・国際地域間交流を推進する。

#### 5. 会員加入の促進

活発な学会活動のためには、若手研究者をはじめとする新会員の増加が課題であることから、引き続き新会員の加入促進につとめる。

#### 6. 日本島嶼学会賞の選考・授与

日本島嶼学会賞は、若手研究者の研究活動を奨励することを目的とした研究奨励賞部門と、島嶼学の発展に多大な貢献をなした研究業績を有する会員を顕彰する栄誉賞部門からなる。両部門の選考方法などの制度運用の改善をはかりつつ、さらに充実したものにしていく。

#### 7. 日本島嶼学会研究助成の実施

競争的研究資金への応募が困難な環境にある若手研究者・在野研究者・実践家等を対象にした研究助成を行なう

#### 8. 学会ウェブサイトの充実

ニュースレターの学会ウェブサイト上でのオープンアクセス化を行うなどして、会員に加え内外の研究者・団体等にも広く読まれる HP を目指す。また英文版の更新にも努力する。

#### 9. 災害に伴う島嶼問題への調査研究協力

石川県能登半島地震や東日本大震災によって被災した近隣島嶼への影響と復興調査研究協力を行うとともに、宮城県出島等の離島に関する架橋検討会への専門家・研究者の派遣を行う。

#### 10. 島の医療を考える研究会の活動推進

島の医療体制の現状と課題について担当理事を配置するとともに、研究会を開催し、島嶼医療に関わる関係者とともに議論を深めていく。

## 2026年度 日本島嶼学会予算（暫定版）

2026年4月1日から2027年3月31日まで

### 1. 収入の部

(単位千円) (単位円)

大項目	小項目	2026予算額 a	2025予算額 b	摘 要
1. 会 費		1,590	1,590,000	
	1. 会員会費	1,490	1,490,000	
	2. 賛助会費	100	100,000	
2. 寄付金収入		0	0	
3. 雑収入		10	10,000	
4. 繰越金		6,000	6,652,674	
収入合計		7,600	8,252,674	

### 2. 支出の部

大項目	小項目	2026予算額 a	2025予算額 b	
1. 総務費		211	175,000	
	1. 通信費	50	50,000	
	2. 謝 金	0	0	
	3. 雑 給	20	10,000	
	4. 会議費	6	6,000	
	5. 会場費	21	21,000	
	6. 旅費交通費	50	50,000	
	7. 印刷製本費	17	17,000	
	8. 消耗品費	8	8,000	
	9. 諸会費・新聞図書費	36	10,000	
	10. 委託費	0	0	
	11. 手数料	3	3,000	
	12. 備品費	0	0	
2. 事業費		2,613	1,468,000	
	1. 通信費	50	50,000	
	2. 謝 金	40	40,000	
	3. 雑 給	11	11,000	
	4. 会議費	11	11,000	
	5. 会場費	5	5,000	
	6. 旅費交通費	5	5,000	
	7. 印刷製本費	879	734,000	
	8. 消耗品費	9	9,000	
	9. 諸会費・新聞図書費	0	0	
	10. 委託費	0	0	
	11. 手数料	3	3,000	
	12. 備品費	0	0	
	13. 助成金	600	600,000	
	14. 基金積立	1,000	0	
3. 予備費	(次年度繰越)	4,776	6,584,674	
支出合計		7,600	8,227,674	

## 第 13 回 (2026 年度) 「日本島嶼学会賞」候補者募集について

日本島嶼学会賞は、将来島嶼学および本学会をリードして活躍することが期待される若手会員の顕彰を目的とする「研究奨励賞部門」、島嶼学の発展に多大な貢献をなした業績を有する会員を顕彰し、その栄誉を称えることを目的とする「栄誉賞部門」、の2部門からなります。

授賞候補者は、いずれの部門においても自薦または他薦により推薦された者の中から、選考委員会による選考の後、理事会の議を経て決定されます。授賞年度に開催される総会において、研究奨励賞部門受賞者には賞状および副賞、栄誉賞部門受賞者には賞状が授与されます。

このたび、第 13 回 (2026 年度) 受賞候補者の募集を下記の要領で行いますので、奮ってご応募ください。詳しくは以下の応募要領をご参考ください。

2026 年 3 月 6 日  
日本島嶼学会 会長 小西 潤子

### 日本島嶼学会賞応募要領

日本島嶼学会賞（以下、学会賞という）の応募にあたっては、本要領に従って応募申請書をご作成の上、PDF ファイルにして、下記「申請書提出先」宛のメールに添付して提出してください。

#### 応募資格

1. 研究奨励賞部門 2026 年 4 月 1 日現在 45 歳以下の本学会の会員
2. 栄誉賞部門 2026 年 4 月 1 日現在本学会の会員資格を有する者

#### 応募〆切

2026 年 5 月 15 日 (金) 23:59 厳守

#### 申請書提出先

学会賞選考委員長 藤田陽子 award.jsis@gmail.com

#### 申請書 記載事項 (様式は自由)

##### 1. 研究奨励賞部門

- (1) 応募年月日
- (2) 申請者氏名
- (3) 生年月日および 2026 年 4 月 1 日現在の年齢
- (4) 出産・育児・介護・その他の事由のため研究中断がある場合はその期間
- (5) 学位 (取得年月、学位名称、取得大学・研究科名)
- (6) 現在の専門分野
- (7) 所属機関・職名 (学生の方は 2026 年 4 月 1 日現在の学年)
- (8) 連絡先住所 (所属あての場合は所属機関名も)・メールアドレス
- (9) 最終学歴
- (10) 応募研究課題
- (11) 応募研究の業績の概要 (A4 用紙 1 枚以内)
- (12) 今後の研究の展望 (A4 用紙 1 枚以内)
- (13) 応募研究の内容をもっともよく表しているとする論文・発表要旨等 1 篇 (スキャンした PDF ファイル等で可)
- (14) 応募研究にかかわる業績リスト  
以下の項目に分けて記載すること
  - ①学会誌「島嶼研究」に掲載された論文
  - ②本学会の大会での発表

- ③その他、本学会の中での報告、各種活動、作品等
  - ④本学会以外の学会誌等に発表した論文（著書を含む）
  - ⑤本学会以外の学会等での発表、各種活動、作品等
- (15) 競争的研究費の採択状況（代表者のみ）
- (16) 他の学会賞等の受賞歴（学会名、受賞名、受賞年、受賞タイトル）

#### ※申請書作成にあたっての注意事項

- 「(10) 応募研究課題」とは、研究奨励賞に応募いただく研究全体のテーマです。学会等で発表された論文等の個別のタイトルではありません。
- 「(13) 応募研究の内容をもっともよく表しているとする論文・発表要旨等」および「(14) 応募研究にかかわる業績リスト」については、未刊行の業績は対象としません。したがって、投稿済みであっても査読中や編集中の業績はこれらに含まないでください。
- 「(14) 応募研究にかかわる業績リスト」には、「(10) 応募研究課題」に記載した研究テーマに関連していれば、本学会に関係する業績（『島嶼研究』や大会での発表など）以外についても記載してください。なお、直近3年以内の研究業績を中心に評価します。
- 「(15) 競争的研究費の採択状況」は「(10) 応募研究課題」に関するものを記載してください。
- 選考の過程で追加資料の提出をお願いする場合があります。

#### 2. 栄誉賞部門

- (1) 推薦年月日
- (2) 推薦者氏名
- (3) 推薦者の住所・連絡先（メールアドレス等）
- (4) 被推薦者の氏名および島嶼学の進歩と発展に多大な貢献をなしたことを示す説明書（A4用紙1枚以内）

以上

第13回（2026年度）日本島嶼学会 学会賞選考委員会

## 2026年度日本島嶼学会研究助成申請について

日本島嶼学会では、2022年度より競争的研究資金への応募が困難な環境にある正会員・学生会員を対象に研究資金を助成し、島嶼学の一層の発展を図ることを目的に、当面5年間の時限付き制度として、日本島嶼学会研究助成を行っています。以下の応募要領をご覧ください。応募資格に該当し、助成を希望する方は申請してください。

日本島嶼学会 会長 小西 潤子

### 2026年度 日本島嶼学会研究助成 応募要領

日本島嶼学会研究助成（以下、研究助成という）の応募に当たっては、この要領に従って、申請書類（様式1～4）\*に必要事項を記入し、PDFファイルにして、選考委員長あてメールに添付して提出してください。

\*申請書類（様式1～4）は学会ホームページからダウンロードしてください。

応募資格者：日本島嶼学会正会員・学生会員資格を1年以上有する者のうち、下記のいずれかに該当する者

- ①大学院生、ポストドクターなど、無期雇用の職に就いていない研究者
- ②正規・非正規雇用の在職者（教員・公務員・民間企業など）で、科学研究費の研究者番号を付与されていない者
- ③個人事業主やフリーランスで、保健・医療・芸術・地域振興・地域貢献などの実践活動に携わる者

助成額：応募1件あたり最高10万円（最大2件採択予定）

助成による研究期間：2026年10月1日から、2027年9月30日までの1年間

研究成果の公表：日本島嶼学会研究助成に関する細則の1.に基づき、助成を受けた翌年度の大会で、研究成果の発表を行う。また、助成による研究期間終了後、1年以内に『島嶼研究』に論説、研究ノート等を投稿する。

審査方法：日本島嶼学会研究助成選考委員会で選考する。

応募〆切 2026年5月15日（金）23時59分 厳守

申請書送付先 日本島嶼学会研究助成選考委員長 波多野 想 (sohatano@cs.u-ryukyu.ac.jp)

以上

2026年度日本島嶼学会 研究助成選考委員会

## 日本島嶼学会 2025 年度第 4 回理事会 議事録

【2025年10月19日（日）17:00～19:45（オンライン開催）】

### 1. 開会宣言 17時00分

小西会長より開会宣言が行われた。本理事会は、現地会場とテレビ会議システムを併用し、ハイブリッド形式で行われた。当該テレビ会議システムは、出席者の音声と映像が即時に他の出席者に伝わり、出席者が一堂に会するのと同様に適時的確な意見表明が互いにできる状態となっていること、また、これにより本理事会は、出席者が一堂に会するものと同様の相互に十分な議論を行うことができる会議であることが確認された。

### 2. 理事出欠確認（50音順）

【テレビ会議出席】小西会長、村上副会長、大塚常務理事、大西常務理事、青木・長谷川・野呂・藤田・前泊・前畑・町・松村の各理事、澤田委員

【欠席】鳥居副会長、真崎・溝田・山本の各理事（4件委任状提出済）

【オブザーバー】可知参与

【書記】松村

### 3. 報告事項

#### 1) 2025年年次大会について

小西会長より、2025年次大会について報告がなされ、承認された。

#### 2) 2025年度第3回理事会議事録

松村理事より、前回議事録の報告がなされ、承認された。

#### 3) 2025年度総会議事録

松村理事より、2025年度総会議事録の報告がなされた。議事録は、一部加筆し、様式を簡略化した修正案が承認された。

- 4) 学会誌『島嶼研究』26-2状況報告（山本理事）  
町理事より、島嶼研究 26 巻 2 号は 2025 年 9 月 30 日に発行（論説 1 編、研究ノート 3 編、資料 1 編を掲載）、島嶼研究 27 巻 1 号（2026 年 3 月 31 日に発行予定）：現在のところ、投稿原稿なしと報告された。
- 5) 島の医療を考える研究会報告  
前畑理事より、島の医療を考える研究会報告がなされた。
- 6) NL80号発行について  
澤田委員より、11 月 20 日（木）発行予定の第 80 号の掲載コンテンツと担当者の確認を行なわれた。掲載コンテンツと担当者は 2025 年度通常総会の報告、2025 年次羽幌天売島大会の報告、2025 年度日本島嶼学会総会 議事録、2025 年度第 3 回理事会（8/29 開催）議事録、第 8 回島の医療を考える研究会の報告、2026 年次瀬戸内大会の案内、会員の動向、会費納入のお願い、新刊紹介などの予定を確認した。
- 7) 2025年次大会報告、決算報告  
小西会長より、2025 年次大会の収支の内訳が報告され、承認された。
- 8) 会員動向  
長谷川理事より、新入会会員 2 名、退会者 0 名が報告され、承認された。
- 9) ISISA2029横浜大会の準備  
長谷川理事により、実行委員体制についての準備状況が報告された。ISISA の例年の実行委員会体制として、組織委員会、学術委員会、2つの実行委員会体制があり、特に、学術委員会は、日本島嶼学会理事や日本の島嶼研究者が関わる可能性があることが共有された。またエクスカージョンについて ISISA 側の希望と調整を進めていることが報告された。引き続き、例年の参加者数を参考に、会費の設定、ノベルティ、スポンサーの確保等、準備を進めていくことが共有された。
- 10) 規程等の文言修正  
小西会長より、総会で承認された規定等の HP 公開に向け、編集委員会規定等の確認が行われた。また、査読規定と申出対応要領についても、併せて公開することが承認された。
- 11) その他  
台風 22 号、23 号で被災された伊豆諸島および群発地震が続くトカラ列島へのお見舞いの文言の HP の掲載提案がなされた。八丈島・青ヶ島でのボランティアの受付開始の情報共有がなされた。

#### 4. 協議・審議事項

- 1) ニュースレターの公開について  
澤田委員より HP でのニュースレター公開に向けた準備状況が報告された。公開方法については、①ID、PW を付与して会員限定で公開する、②個人情報、秘匿性の高い情報などを削除して公開、③ニュースレターをそのまま HP で公開の 3 つ案について検討を行なった。他学会でも一般的であり、対応が簡単である③の案を基本に引き続き検討を行なった。今後、公開を前提としたニュースレターづくりや、これまでニュースレターで共有していた学会の内部資料である総会議事録や理事会議事録の共有方法を含めて具体的な検討進め、次回の理事会で議論することとなった。第 81 号と要望のあった 77 号までは、同時での公開に向けて準備を進めることとなった。
- 2) オール会員メーリングリストについて  
長谷川理事より、現在、全学会員を対象としたメーリングリストは存在せず、学会員へ連絡をする際には、学会アカウント管理者から全会員へメールでの一斉送付となっていることが報告された。小西会長より、会員メーリングリストを作成することについて、提案がなされ、承認された。メーリングリストの管理担当者や会費の納付状況を反映した学会員の名簿管理方法等、継続審議していくこととなった。
- 3) 2026年度大会開催候補地  
村上副会長より、2026 年度大会の日程は、2026 年 8 月の最終週もしくは 9 月の第 1 週、場所は愛媛県今治市を予定していると報告された。本会場は本土側、エクスカージョンは今治市内の島にて調整を行っていると報告がなされた。
- 4) 次回理事会候補日  
次回理事会を 3 月の初旬に開催する。

※理事会後、3月5日（木）17:00～オンラインにて開催することが決定した。

## 5. 閉会宣言 19時45分

現地会場とテレビ会議システムを用いたハイブリッド形式での理事会は、終始滞りなく議事が終了した。

# 日本島嶼学会 2025 年度第 5 回理事会 議事録

【2026年3月5日（木）17:00～19:15（オンライン開催）】

## 1. 開会宣言 17時00分

小西会長より開会宣言が行われた。本理事会は、現地会場とテレビ会議システムを併用し、ハイブリッド形式で行われた。当該テレビ会議システムは、出席者の音声と映像が即時に他の出席者に伝わり、出席者が一堂に会するのと同様に適時的確な意見表明が互いにできる状態となっていること、また、これにより本理事会は、出席者が一堂に会するものと同様の相互に十分な議論を行うことができる会議であることが確認された。

## 2. 理事出欠確認（50音順）

【テレビ会議出席】小西会長、鳥居副会長、村上副会長、大塚常務理事、大西常務理事、青木・長谷川・野呂・藤田・前泊・前畑・町・松村・溝田の各理事、澤田委員

【欠席】真崎・山本の各理事、可知参与（オブザーバー）（2件委任状提出済）

【書記】松村

## 3. 前回議事要旨確認

第4回理事会議事録は、修正案が承認された。

## 4. 報告事項

- 1) 2026年次瀬戸内大会告知第2号  
西村実行委員の代理として、澤田委員より報告がなされた。引き続き、5月理事会で確認することとなった。
- 2) 「島嶼研究」編集状況  
山本理事の代理で、鳥居副会長より島嶼研究の編集状況が共有された。
- 3) ニュースレター81号の編集方針について  
溝田理事より、ニュースレターの公開に向けた準備状況、3月20日発行予定のニュースレター81号の掲載予定の内容が報告された。
- 4) 国際島嶼学会（ISISA）準備状況  
長谷川理事より、2029年度大会の準備状況が報告された。
- 5) 会員動向  
入会者、変更連絡、退会者等の会員動向が報告された。
- 6) 第9回島の医療を考える研究会  
前畑理事より、前年の開催状況、現在の調査状況が共有された。

## 5. 協議・審議事項

- 1) 日本島嶼学会候補者募集  
藤田理事より、候補者募集の文案が提案され、承認された。
- 2) 日本島嶼学会研究助成募集

波多野理事の代理として、小西会長より、日本島嶼学会研究助成募集の文案が提案され、承認された。

- 3) 2026年度の事業計画・暫定予算  
小西会長より、2026年度の事業計画・暫定予算について説明がなされ、承認された。
- 4) 2025～2026年度役員体制についての確認  
小西会長から、事前送付された資料に基づき、役員体制についての確認がなされ、承認された。
- 5) 2027年次大会の準備…年次大会企画委員会設置について  
小西理事より、年次大会企画委員会設置の提案がなされ、引き続き検討を進めることとなった。
- 6) メーリングリストについて（長谷川理事）  
長谷川理事より、Google メーリングリストを使用した全学会員メーリングリストの作成状況について共有がなされた。運用についての協議を行い、会員への趣旨説明と参加依頼を送付することとなった。
- 7) 年次大会プログラムの著者抄録利用許諾について  
大塚常務理事より、国立研究開発法人科学技術振興機構から日本島嶼学会年次大会プログラム・発表要旨集のJDreamIII及びJ-GLOBALでの利用・公開について、照会が届いていることが共有された。著者である学会員の意向も重要であることから、次回総会の議題とすることとなった。
- 8) 次回理事会候補日（小西会長）  
5月中旬を予定。

## 6. 閉会宣言 19時15分

現地会場とテレビ会議システムを用いたハイブリッド形式での理事会は、終始滞りなく議事が終了した。

## 2026年次「今治大会」のお知らせ（第2報）

日本島嶼学会2026年次大会は「今治大会」とし、2026年9月4日(金)から7日(月)に愛媛県・今治市域にて開催予定です。理事会（9月4日）および本大会・総会等（9月5日・9月6日）は「今治地域地場産業振興センター」にて開催し、エクスカージョン（9月7日）は今治市・岡村島を予定しています。

なお、募集開始は2026年5月下旬を予定しています。その際は学会HPにて告知しますので、ときおりHPをご確認下さいますようお願いいたします。

(2026年次大会担当 村上和弘)

## 日本熱帯生態学会大会（大阪大会）のお知らせ

日本島嶼学会は、日本熱帯生態学会と連携協定を結んでおり、相互の大会にそれぞれの学会員と同等の資格で参加・発表が可能です。日本熱帯生態学会JASTE36大阪大会が、2026年6月20～21日に大阪公立大学杉本キャンパスで開催されます。参加を希望する会員は、「連携学会員」として参加登録ください。発表する場合の登録〆切は、5月8日（金）17:00です。6月22日には大阪公立大学付属植物園へのエクスカージョンが予定されています。詳しくは以下のウェブサイトをご覧ください。

<https://sites.google.com/view/jaste36>

## 「島の医療を考える研究会」のご案内

2018年12月に本学会員有志により立ち上げられたこの研究会は、「島の医療体制づくり」という長年の島嶼社会の命題に応えるため、医療関係（保健・福祉を含む）の専門家においていただき、島々の医療をめぐる現状と課題、および具体的な対策について知見を集めることを目的としております。2019年の第1回では、瀬戸内海の島々の救急医療と初期対応の問題が話し合われ、それ以降、年次大会に合わせてさまざまなテーマで研究会を実施いたしております。

回を重ねていくなか、改めて日本の島々の厳しい医療事情が浮き彫りになると同時に、基盤としてある地域社会・コミュニティと島同士の相互補完的なネットワークの重要性についても明確となっているように思われます。一昨年の第7回となる研究会では、天草諸島の架橋島や面積・人口規模の大きな奄美大島においても地域医療の存続が危ぶまれる状況にあるとの問題提起がなされ、国内の島々に共通してみられる問題事象、問題構造を見捉えながらの全体議論となりつつあるように思います。

昨年の第8回の研究会（→ポスター）では、島嶼の国際比較の視点から、日本の島々にとっても現状の打開へとつながる新たな知見が得られたように思います。木塚雅貴会員からは「日本とスコットランドの離島における医療政策・医療状況と島民の意識に関する比較考察」というテーマでご講演をいただき、厳しい生活条件下（寒冷、強風etc.）にありながらシェットランド諸島では極端な人口減少がみられないこと、小さな島々にも基本的な医療資源が配置され、医療人材を育てながら医療体制が構築されていることなど、大変印象的でした。当日の研究会では、なぜそのような現状対応が同諸島では可能であるのかという深層域の熱い議論が展開され、研究会として後日に詳しくご報告していきたいと考えております。

現在、当研究会では大木浩会員より緊急報告をいただいた血液備蓄所撤退による血液供給の問題について、有志の方々に分担をお願いしながら国内10島の影響調査を進めております。その調査結果を土台として、次回の研究会では皆様とともに議論できればと考えております。本年は今治大会の開催期間中、9月6日（日）の午後にハイブリッド開催を予定しており、ぜひご参加くださいますよう、よろしくごお願い申し上げます。

### 「第8回 島の医療を考える研究会」のご案内



FAIR ISLE SURGERY  
NHS.uk

この研究会は「島の医療体制づくり」という日本の島々の長年の命題に応えるため、島の医療に関する知見を集めることを目的として2019年1月に活動を開始しました。  
 ※回目となる今回は北海道の羽幌町中央公民館で開催し、日本とスコットランドの医療政策・医療事情についてご講演いただけます。また、問題提起いただいたテーマを掘り下げ、活発に議論してまいります。オンラインでもご参加いただけますのでお申し出ください。

写真：スコットランド・シェットランド諸島 Fair Isle（フェア・アイランド）の診療所 本塚雅貴氏ご提供

- 日時：2025年8月31日（日）13:00～16:30
- 会場：羽幌町中央公民館 小ホール  
北海道苫前郡羽幌町南6条2丁目
- 参加申込：参加費は会員・非会員ともに無料です。  
オンライン（Zoom）参加の場合は、下記フォームより前日までにお申し込みください。

**プログラム**

<司会>島の医療を考える研究会

<https://forms.gle/NYLC9Fwf3X42fFUS>



第1部 海外の島の医療状況	第2部 報告・議論
<p>講師：京都府立医科大学大学院 <b>木塚 雅貴 氏</b></p> <p>テーマ：「日本とスコットランドの離島における医療政策・医療状況と島民の意識に関する比較考察」</p> <p style="text-align: right; font-size: 6px;">※質疑応答あり。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 血液備蓄所撤退による影響（調査報告）</li> <li>● 架橋島のストロー現象</li> <li>● オンライン診療体制づくり</li> </ul> <p style="font-size: 6px; margin-top: 5px;">主催：日本島嶼学会 島の医療を考える研究会                      共催：日本島嶼学会 次世代研究ネットワーク支部                      後援：島嶼コミュニティ学会、島嶼産業研究会</p>

昨年の研究会のポスター

（文責 前畑 E-mail: akemi.maehata.sg@hosei.ac.jp）

新刊紹介 永田俊一 著

# 『溟北先生時代日記』

(文芸社、2017年1月、B6判190頁、1,200円(税別))

圓山溟(めい)北:1818~1892年は、江戸後期から明治期に佐渡で活躍した儒学者・教育者であり、50年に渡り明治維新変革期の佐渡教育界を牽引した。当時の佐渡事情は特異でもあった。明治初期岩倉使節団に随伴する女子留学生5名中4名が佐渡関係者であり、当時日本最大貿易商高田商会高田慎蔵・三井物産/日経新聞/東京海上火災創設にかかわった益田孝(眼前の利に迷うことを戒めた志高き実業家にして「千利休以来の大茶人」とも称せられる存在)・三菱商事社長(財閥解体時の責任者)田中完三等の国内経済界要人も輩出し、全国最初の鉱山学校や、金山技術=活字での英語教科書を刊行し、差別部落向けの特別校も2校存在した。それらの中核には、奉行所地役人田中葵(き)園が設立に関わった修教館があり、溟北父(学古)と子溟北が教壇に立った。溟北は私塾(学古塾)で平民も教えた。江戸に学んだ(亀田鵬斎:折衷学の子=亀田綾瀬塾の塾頭)後に佐渡に戻り、勤王の志篤く佐渡に尊王思想を根付かせたが、戊辰戦争では切腹覚悟で佐幕の論を張った気骨漢でもある。維新後は青少年の教育に一身をささげ、維新前後の新社会「新人物の木鐸(ぼくたく:世の中を正しい方向へ導く役割を担う人)」とされた。人材の輩出は金鉱山・夷開港による語学環境に加え、北前船+天領故に諸国往来(上方技術文化/長崎蘭学等)が他藩と比較にならない程自在で、かつ金荷江戸運搬で1年間の江戸滞在もあり、文物・芸能・詩歌・技術を学ぶ機会に恵まれていたこともある。また以前に紹介した小林祐玄(元市教育長)の主張するように、地役人の矜持と責任感も大きな貢献/役割認識として作用していく。明治時代に活躍した佐渡出身者のほとんどが溟北の門に学び、「明治の新佐渡を造り出す者は、圓山溟北なるべし。維新前後、新人物、彼の提撕を受けざる者殆んど稀也。溟北の佐渡に於けるは、吉田松陰の長州に於ける、西郷南洲の薩州に於けると、相似て、彼は新人物の木鐸たり」とされた。往時佐渡出身全7国会議員・北一輝/玲吉兄弟もその影響下にある。最晩年にも月刊北溟雑誌刊行(明治20-29年/月刊/1-112号⇒廃刊後は明治30年日刊佐渡新聞に森知幾:被差別子弟教育と就職斡旋等により引きつがれる)に尽力する。

著者永田俊一は佐渡二宮出身(生誕及び幼少期は相川/二宮は母の実家/父の起業大成就により島外)で大蔵省主計官・日本銀行理事・楽天銀行社長/会長を務めた人だが、前掲小林に似て奉行所人材の全国区勇躍を島内外に刻印する意義を認識して、本書を興した。「彼の魂、教え、想いは、時を越え、佐渡の島から「夢」となって現れる。現代を乗り越え、未来を掴むために時代を越えて学びとってほしいものがある。溟北が木鐸たるは、かく佐渡の島に信じ託され、託され為し、積み重ねた信頼にある。今また大変動が予期される時代だからこそ信が大切である」とする。元信託協会専務理事・預金保険機構理事長らしい想いで結語している。総じて教育畑外ながらも、時代社会と教育界ニーズの動向を良く精査しており、読み応えがある。



目次 夢枕：幽明界の日の溟北 明治 25 年 5 月（以下 M25.5 等と略記） 夢から覚めて H26.1 長坂：安政（以下 A） 2 金山：A3 虎狼痢（コレラ）：A6 晴間：文久（以下 B） 元 羽州：B2 江戸：元治元 動乱：慶応（以下 K） 2 孤島 6：K3 維新：K4/M 元 変革：M4 学制：M9 試練：M14.6 中学：M17.8 大学：M19.1 文稿：M20.12 序文：M22.9 暴動：M23.8（米騒動では北陸最大） 秋懐：M24.10 家幅：M25.3 辞世：M25.5 夢の続き：H29.5 付録「信託」について 終わりに 参考文献（長嶋 俊介）

新刊紹介

森本 孝 著

## 『宮本常一と民俗学』

（玉川大学出版部、2021 年 9 月、A5 判 176 頁、2,500 円（税別））

この本は「日本の伝記 知のパイオニア」シリーズ第一回配本物の一つとして刊行されたものである。佐渡から出て離島学（後に島嶼学）を志していた時出会った宮本（以下「師」）『日本の離島 I・II』は、「学問」の正道を示すものであった。聞き取りを重ねて現場の声を常民及びフィールドの記述学 descriptive science に高め、「常民」から学んだ技術や道具や知恵や協働性を、他地域の課題や産業振興等に活かす伝道師でもあった。権威主義的アカデミズムへの批判が逆巻いていた大学紛争時に「新風」を送り続ける時代の寵児であり、ある意味かっこ良い反逆児（正当性の歪み抵抗者）でもあった。

一般には絵本・子どもの本に分類されるものであるが、軽い照会物でも、英雄伝でもなかった。数多くの師評伝物を超えて、嘘のない等身大の宮本常一が分かり易くまとめられており、傑作物であるとの感銘を強く受けた。森本は刊行半年以内の翌年 2 月に没している。その闘病中に心血注いで書き込んだ内容が凝縮している。ルビ無し原稿分量で取り組んだため、結局 2/3 に縮めている。26 年 1 月師第 44 回水仙忌出席の森本夫人（女権認識的には婦人）に是非全文読んでみたいと懇願した。日本観光文化研究所宮本所長の下で働いてきた森本だけに宮本人脈に精通し、師取材対象者や周防大島育ち時代からも含む全生涯過程で出会い関わった重要人材（全フル名前/ルビ付き）にも光がしっかりと当たっている。類書にありがちな巨人（ややもすると虚像）扱いをしない点が共感を持てた。それは師の開いたライフヒストリー手法そのものの正当な継承であり反転成果でもある。

また記述学としてのライフヒストリーはその後生活学手法の一つとして確立していく。「聞き取り」を「拳証」事実として学問的に扱えること、民俗学が民族学とともに学問=文化人類学の基礎手法として日本で正統扱いされる道筋に、丁度宮本・柳田国男・渋沢敬三の立つ位置があった。渋沢は大学人になると「目指す学問」が出来なくなると阻止した慧眼は、往時の学問環境の反映でもあった。生活学会や太平洋学会立ち上げにも参画した師の道筋に、ある種快哉と共感と同根性を覚えるのは、私事ながら経済学から師記述学を「島認識ベース」として読み込んできた著者として「島実体/現場学への回帰」への誘いであり、未だその後塵を押し続けている自分に気づかされる。

生活学のパイオニア振りに長けた文体/調査/被調査者への敬意事情や視座/背景/事情への気配りにも得心が持てた。離島現場学の祖である師が記述学的大成をし、何故無給離島振興協議会事務局長として尽力し輝いたか、柳田国男（為に民俗学に狭く分類されがちである）・渋沢敬三（為に海/漁業博物学や政財界/国会関与）との出会いのタイミングも師「巨象化の必然的ファクター/アクター」に結びつくが、そこを森本は「一人称」=飾る脚色もなく語り説いている。紹介者は 1990 年代から宮本婦人とも手紙のやり取りで依頼を受けたり、周防大島でご子息様と交流したりしてきたが、この本理解で巨人理解に偏らず、さらに身近な存在となった。島と関わる者必読の書視点で

専ら読み込んできた人間：紹介者=長嶋にとっての必然は、必要条件的な狭さでしかなかったことをこの本でさらに深く思い至った。宮本の文才の所以形成過程があり、求めよ然らば与えられんの希求が道を開き、地位立場は違えども学の志（常民性への敬意と学の正当性認識）を高く保つ先達たる渋沢の指示を受けて足で稼ぐ調査に導かれ挑戦し、戦前からの（山の民調査や島嶼では屋久島等）蓄積と戦中戦後の病/学び/実践/課題に真摯に取り組んできたことが、地道なしかし得難い成果として結実し続けていく。森本は九学会連合調査と武蔵野美術大学就職経緯迄簡潔に紹介してくれているが、紹介者としては佐渡 40 回以上調査・啓発・振興支援と、西田幾多郎愛弟子西谷（奥能登出身）従兄の未来社社長（佐渡出身）との縁、鬼太鼓座（後に一部が鼓童として島内残留）についても、強いつながりと恩義を覚える。評者は宮本の生まれ変わりと言われ（当時島を学問として本気で正面から取り組む人が少なく、地域振興派の身びいきで）煙い想いをしてきたこともあるが、元々師への敬意（卒論では宮本離島学から学んだ離島実体の理論経済学的整理に挑戦してきた）と感謝の念が強い存在である。森本孝が亡くなった知らせでこの本を読むこととなったが、伝記物は次世代に向けた公共財的存在であり、同企画は当を得たものである。森本の健康事情もあり第一回配本（岡倉天心と思想、寺田寅彦と物理学、田中久重と技術）に加えられた。第二回は、柳宗悦と美、今西錦司と自然、留岡幸助と自立支援、荻野吟子とジェンダー平等。第三回は小泉八雲と妖怪、牧野富太郎と植物研究、加藤セチと女性科学者たち（2025 年）である。何れも遜色の附けがたいパイオニアであるが、師を取り上げてくれた編集者・企画者の慧眼に謝意を表したい。

森本を通じて深く思い当たるのが、相互扶助主体（若い頃読んだクロボトキの影響を森本は明記）としての常民への宮本の深い敬意と、「忘れられた日本人」視座の記録化（使命観）と警鐘、そして幅広の現場（民と地域の智慧や技術と生きざま・暮らしぶり・一人ひとりの人生）から学ぶ丁寧な学問姿勢が育んだ見る力と人材育成力、そして生活学・道具学・離島学・辺境学（太平洋学/山村学を含む）への貢献ぶりである。2025 年 5 月に柳田國男生誕 150 年記念「第 46 回山桃忌」（紹介者も過去にパネル協力）が福崎町主催であったが、遅く亡くなった師の「水仙忌」も来年には第 45 回を迎える。さほどに近くで関わった人たちが今も集う、強く慕われ続ける存在である。飾らない人格や確かな意思疎通性に、ドラッガーが指摘する真のリーダー的要件の体現者ぶりを覚える。

目次は、1 家族のぬくもり—0 歳～6 歳ごろ。2 小学校で—6 歳～15 歳。3 通信講習所と郵便局時代—16 歳～18 歳。4 師範学校と教員時代—18 歳～23 歳。5 柳田先生と渋沢先生—24 歳～28 歳。6 アチックミュージアムのころ—32 歳～36 歳。7 戦後の日本を歩く—38～56 歳。8 若き仲間たちと—57 歳～73 歳。カバーのみならず裸表紙の写真もあえて紹介するのは、図書館で目にするであろう子供達向けのデザインへのこだわりと親切心があまりにも素晴らしく、著者婦人様や観光文化研究所の元職員の方々もそれに感銘していたためでもある。島嶼学会員の知のパイオニア的活躍にも期待したい。（長嶋 俊介）



新刊紹介

叶芳和 編著

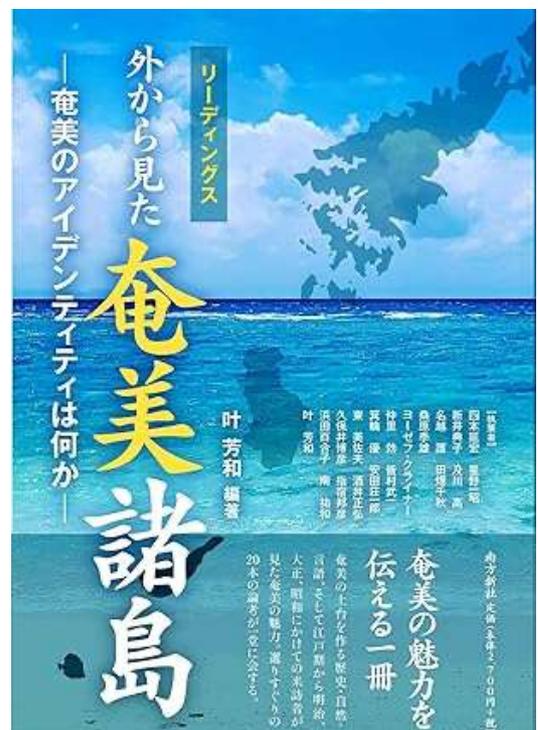
# 『リーディングス 外から見た奄美諸島 —奄美のアイデンティティは何か—』

(南方新社、2025年4月、A5判390頁、2,700円(税別))

最後の頁まで読了した時に奄美観に新たな追加と刷新が訪れるであろう。島を多様な専門知とアングルで見て歩いて学んで知ったつもりの世界とは違う深み・重層性・四次元的な重なり of 相互作用が怪しくも独り歩きを始めるであろう。全ての各章が別章と関わっていて痛快でもある。それは島そのものの持つ相互作用力でもある。学会員・元会員・『日本ネシア論』(藤原書店) 参画者・鹿児島大学で関わった郷土史家も文中人物として登場する身近で嬉しい本でもある。全20章の一つの欠けもならぬ総合奄美学のリーディングスの提示に感謝の念が強い。編者独走ではなくオンラインで議論しつつ集約したものであるだけにバランスが執れ未来世代に向けた濃密な発信となっている。同じことを佐渡・奄美・隠岐・吉岐対馬・五島・種子屋久・先島で出来るかと言えば否であり、将に慶事であり衝撃でもある。出版社尽力も多としたい。

以下仔細を見みよう。第一部 奄美学のインフラ 歴史・自然・言語 ①考古学から見た奄美—カムイヤキ発掘— ②奄美の世界自然遺産 ③奄美語の力—生物文化多様性のために—。カムイヤキ大規模発見からまだ50年もたっていない。奄美・沖縄交易圏史観パラダイムシフトが「発見」に関わった当人からダイナミックに語られており第1章を飾るに相応しい。自然遺産認定過程の諸々も身近に体験したが、当事者(内部事情熟知)による過程整理は意義深い。当初南西諸島(日本軍用語)から琉球名の登場(再 coming-out) 経緯述懐はまだタブーなのか何れもっと議論があっても良いであろう。奄美沖縄の言語文化圏と生態系分布域との重なりは1983年沖縄大百科事典で受けた衝撃でもあったが、それに学術的理解が加えられている。言語(日本古語系・中国系・朝鮮系)・歌半語・生物文化多様性、それに口承文化や伝統知や「多言語の富」が添えられることで「奄美学位相」の力強さが加えられている。

第二部 外から見た奄美諸島各論 ④柳田国男『海南小記』 ⑤名越左原太『南島雑話』 ⑥笹森儀助と奄美 ⑦ドゥーダーラインの見た明治期の奄美 ⑧ハリングが見た米軍政下の奄美 ⑨私(ヨーゼフ クライナー)と奄美 ⑩島尾敏雄「ヤポネシア論」⑪薩摩藩は奄美諸島をいかに統治したか ⑫薩摩藩による奄美差別に関する一考察 ⑬西郷隆盛の奄美観 ⑭奄美のサトウキビと黒糖 知ってるつもりの古典・著名人を別アングルや達人に至るライフヒストリーで知を重ねることは名著背景理解(含時代制約)と理解深掘に欠かせない。非拡張等身大人格・非誇張古典照会は総合知加除に有効である。柳田の初離島旅は佐渡(貴族院職員石見姓から人の社会的移動に関心)1920年6月。8月東京朝日新聞社客員就任条件の全国各地調査旅行が「海南小記」(後に『海上の道』)。12月発で目的たる伊波普猷(沖縄学の父)と直に会い、先島に至り、帰路2月8-14日奄美-加計呂麻島。帰京早々南島談話会を立ち上げて、



学問創生と地域人材発掘並びに育成を本格展開する。国際連盟委任統治委員（同旅熊本で受任）を21-23年に半年ごと務めるが、帰国半年は学開拓/紀行記載等に邁進。民俗学黎明期雑誌『旅と伝説』（1928年創刊から柳田編集）三元社社主は名瀬出身でもある。柳田学展開に奄美・沖縄・佐渡+「孤島苦へのまなざし」も色濃く刻まれている。

「幕末奄美民俗学・動植物学」図解記述者としての名越を柳田90年前の「日本民俗学の祖」とする評価はある意味正しくて、北越雪譜・菅江真澄・松浦武四郎・小泉八雲等再評価にも繋がる視座になる。笹森儀助南島/大島5書は奄美博物館表を今も力強く飾る金字塔でもあり、ここで正しく再評価されている。シベリア・朝鮮半島・千島・九州・南島（含トカラ）・台湾の調査探検のみならず、県史・弘前・農牧社への貢献+西郷顕彰（西郷南洲流謫跡）+大島負債への憤り+大島島司としての身の丈を超えた獅子奮迅は痛快でもある。柳田が『笹森儀助翁伝』精読者こそが「南島談話会」創設者と評した事は柳田の存在価値を高めるものでもある。東大初期ドイツ人・奄美返還直前米国人（海軍側返還理由付協力）・昭和中後期欧州人が奄美調査に関わって残した成果も興味深い。米人戦後直後写真展は鹿児島大学尽力もあり奄美返還70周年を彩った。ヤポネシア論は今迄の所論にあった違和感やある種如何わしさを払拭する「個人史的理解/論説変遷」を丁寧に扱っている。おかげで日本ネシア論提唱に改めて正当な知見を得たともいえる。多様なヤポネシア論が転換期沖縄の大きなうねりに振り回された実相も正確に実写されている。また福島県人たる島尾の日本観での重なりも得心である。薩摩藩奄美統治・奄美差別の史料ベースの見直しも意義深く正当に知見を加えてくれている。船材の一大供給地であり天然の良港を持ちながら「海に背を向けて暮らさざるを得なかった」制約が息苦しくも近世を支配し続けた。西郷隆盛の奄美観は「日本史大転換=明治維新」再評価に響く内容である。西郷が人格的巨人として育まれていく個人史の背景に、奄美大島・徳之島・沖永良部の島生活がある。学び・悟り・民への意識・義憤としての政治の矛盾に目覚め維新巨人化に導かれ飛躍していく「西郷の必然」が読み取れてくる稀有な島論も提供されている。奄美無くして西郷無である。元奄美市幹部の島嶼学会員が、サトウキビと黒糖の蘊蓄に、昆布取引も加えて奄美史（+薩摩藩史+明治商取引史）に新しい切り口を加え、数か所にここがポイントと示し、エピソードも的確に入れて内容も必読である。

### 第三部 奄美魅力のイッピン ⑮司馬遼太郎が心寄せた「島人と奄美文化、⑯田中一村が見た奄美 ⑰奄美島唄考 ⑱奄美の郷土料理 ⑲本場奄美大島紬 ⑳加計呂麻島のネシア発信力

司馬遼太郎がエッセイで取り上げた家族的に付き合いある奄美人（天国と称する）は加計呂麻の人。琴線の魅力が司馬の深い関心事となる。次世代に「助け合うという人間の道徳に、いたわり・他者の痛みを知る・優しさの三語」の大切さを説くが、期待する人間像の背景に、彼へのまなざしを筆者は覚える。島尾敏雄・西郷隆盛・南島人（天国）・島差別（憤り）・島流し（受益）・島への加害（戦争）は司馬遼太郎日本観の一部としても捉えられている。田中一村没後のcoming-outと今に至る過程照会部分も貴重でもある。生前の生き様も端的で当を得ている。彼の庵存続に元会員故築島富士夫（名瀬市元紬・観光課長/里の曙：町田酒造副社長）も関わっている。ここでは触れられていないが色々お聞きしたので懐かしい。奄美各島の島唄は隣集落でも異なる歌詞・方言・音調があり、170年以上前まで歴史を辿れる。六調の輪舞を含め、群島全域の郷友会アイデンティティ強化の役割も果たし、新民謡を含む現在までの変化も追う。奄美郷土料理は島内情報誌編集者が担当。鶏飯より豚飯・島豚（育ち遅く県指導効率至上主義で排除）を地域ブランドに・室町時代確立の三献・奄美開発モズク養殖・旧暦伝統行事食・明治期カツオ漁・琉球由来ミキ・キビ酢・喜界島料理・沖永良部料理等むしろ「ターナーらしい「発見」が小気味よく伝わる。大島紬の「本場物」勝負の歴史と技術と誇りが第一線の当事者から伝わる。終章が編者出身地加計呂麻論。日本ネシア論で触れてくれた島の凄さ・ポテンシャルに、歴史・人口部分を加え説得力を増している。古代奄美は東シナ海交易圏の先進地とする主張に異論はない。また加計呂麻は奄美学の主戦場・ウケユリ交易のエラブユリに先駆けた隆盛・海洋の民・森林資源・島の南薩摩以前は表・島の西前期交易拠点とする視座にも得心が行く。そこで「地政学」を幾度も重ねて説得材料にするが「日本ネシア論」最終章全京秀「耽羅鯨と耽羅海【公共体の海政学のために】」で説

かれた「海政学」をさらに深めた立論（喜界・与論・沖永良部・加計呂麻等）があれば、さらに奄美群島史・奄美学が輝きを増すようにも思えた。

これら 20 論文はまさに奄美総合知の幅と深みと内部相互作用を代表し、本書はその意義深い集約の例である。  
リーディングス Part2 以下も多様にあり得てよい。 (長嶋 俊介)

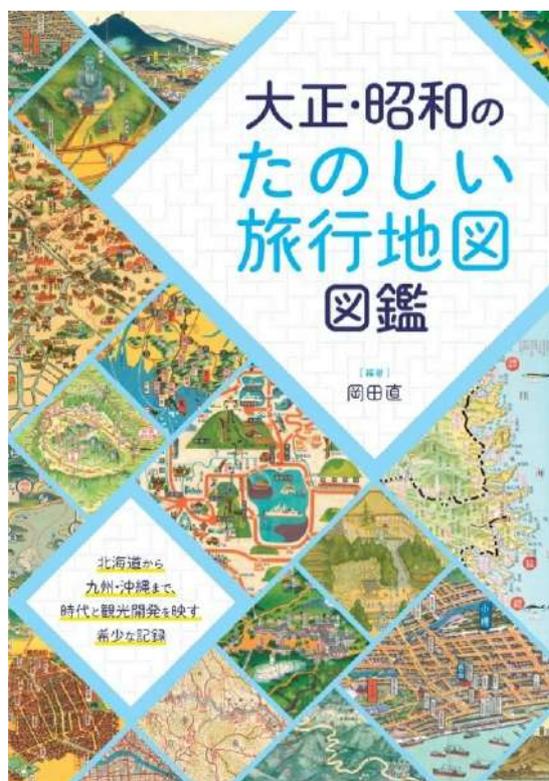
新刊紹介

岡田直 編著

## 『大正・昭和のたのしい旅行地図図鑑』

(三オブックス、2025年12月、大型判400頁、4,500円(税別))

オールカラー145点で鉄道黄金期の大正(1918年)～昭和(1971年)の日本を絵地図で案内する図鑑。なかでも「大正の広重」吉田初三郎による躍動感ある鳥観図は出色で、日光中禅寺湖・華厳の滝等「日本八景」は立体的で凄味がある。香川県豊島産業廃棄物不法投棄事件で数多会合が開かれた豊島公民館には豊島を中心にした吉田初三郎図があり、それが目に焼き付いている者にとり聖書にも値する。鉄道マニア向け配慮もあるが、往時の島事情も嬉しい。金華山全体アップ図では入り口亀島(今は港の一部)から信仰地を経て山頂トレッキング道に誘われる。松島・塩釜は略全島名を確認できる。東北日本海側には油田もある。酒田飛鳥は西無人島聖域も図示、佐渡は寺泊赤泊/寺泊松ヶ崎航路・島内赤泊/小木/河原田航路・両津小樽航路迄記載。観光地としては日蓮がらみで妙宣寺等。羽越では粟島があっても笹川流れ小島群はまだ出てこない。鹿島香取水郷では2神宮の扱いと、潮来向かいの十六島(十二橋)・浮島周辺の過去図が興味深い(今は痕跡僅か)。銚子では南北逆図で海馬(あしか)島周辺の島々名を記載してくれている(陸に上がった海神の娘・あしかの恩返し伝説がある場所)。関東大震災復興地図・昭和7年地図でも人工島群出過程の一部が垣間見られる。東京日帰り地図に伊豆大島があるが昭和3年地図に初島は出てこない。東海汽船前身渋沢栄一社主東京湾汽船海水浴場に千葉館山の鷹ノ島・沖ノ島が出てくる。富山湾では伏木の扱いがあるが雨晴海岸や蛇島等がまだ特別扱いではないが能登島傍の机島・種島記載は嬉しい。東尋坊の雄島は未架橋。知多半島新四国参拝に日間賀島37番/篠島38+39番が出てくる。新興四日市の人工島区画も興味惹かれる。紀州大島は今上天皇御幸碑/トルコ軍艦遭難碑・橋杭岩、紀伊勝浦は弁天島、白浜は円月島が林立している。伊勢宇治山田港=神社港の人工島が目につく記載。琵琶湖は竹生島の北東の小島(現地地理院地図には無名扱い)が記載されている。沖の白石(現)は白石島と記され、当時からの有人島沖島は各図でも無記載(例外は琵琶湖鉄道汽船を買収した京阪電鉄図)。瀬戸内大阪湾では淡路島の鉄路横断福良/洲本線で東行し和歌山深日港・駅行も記されている。成島・地の島・友ヶ島・沖の島も既に観光地ルートである。沼島も記されているが鳴門大毛島は四国とも未



架橋扱い。四国は小松島・和歌山ルートも太い航路。淡路西近接に小豆島、その西北沖家島諸島は位置がおかしいが無人島を含めて詳しい。隠岐諸島も詳しい地名記載。出雲大社近傍の稲佐の浜・出雲二見・筆役島は目立つアングル。宍道湖北から日本海に抜ける一見不思議な水路は現佐陀川（1787年防災開削人工水路北側途中に佐太神社/橋対岸に佐太がある）。瀬戸内では宮島が特別に詳しく桜季節を描く。讃岐観光図は瀬戸内の島々をきちんと配置。1950年山口市刊行「再建山口市観光交通鳥瞰図」/1925年大阪商船瀬戸内海航路図絵（頻度を太さで表示）には各4頁を割く。四国島と九州島の鉄路は存在感あり。復帰直前那覇市街図もある。最後9頁は1922年頃の「日本を中心とする世界の交通」（吉田初三郎が鉄道省委託で平和記念東京博覧会@上野公園用作成）の図。

なおこの本との出会いは長嶋俊介監修『地図で読み解く日本の島』カンゼン2023年表紙画作成関係者からの手配による。アイランドコレクターに取り貴重なな超越時間体験ができ、強く興味惹かれた。篤く感謝したい。

(長嶋 俊介)

【目次】日本全国を総覧するたのしい絵地図  
 ・最新全国旅行図 レクリエーションガイド1964年  
 ・最新鉄道路線図（職員用）1957年  
 [Column\_1] 大阪毎日新聞と「日本交通分県地図」  
 47 都道府県別のたのしい絵地図

【北海道】

・新日本大地図北海道地方（キング附録）1949年  
 ・小樽市鳥瞰図1931年頃  
 ・国立公園大雪山層雲峡1935年頃  
 ・日本八景狩勝峠名所図絵1930年  
 ・阿寒国立公園観光案内図1950年頃

【東北】

・日本交通分県地図「其三十二」岩手青森秋田1927年  
 ・十和田湖名所図絵1925年  
 ・花巻温泉景勝鳥瞰図1955年頃  
 ・奥州平泉名所史蹟地案内1926年  
 ・秋北観光1960年頃  
 ・日本交通分県地図「其二十四」宮城山形1925年  
 ・金華山名勝案内1930年頃  
 ・松島全景1927年頃  
 ・宮城電鉄案内 仙台-塩釜-松島-石巻1928年頃  
 ・羽前庄内龍澤山善宝寺全図1936年  
 ・小野川温泉御案内1927年頃  
 ・日本交通分県地図「其十九」福島1925年  
 ・夏の磐梯高原と夢のスカイラインは招く1964年  
 ・東北観光みちのくの旅1970年頃

【関東】

・日本交通分県地図「其二十一」茨城1925年

・鹿島香取水郷めぐり案内1941年  
 ・日本交通分県地図「其四十」栃木群馬1930年  
 ・日光1932年頃  
 ・日本八景華厳滝名所図絵1930年  
 ・草津温泉交通案内図1965年頃  
 ・日本交通分県地図「其九」埼玉1924年  
 ・東武鉄道沿線名所図絵1925年  
 ・日本交通分県地図「其十五」千葉1924(13)年12月  
 ・総武電車案内（船橋-野田-粕壁-大宮・間）1931年頃  
 ・銚子実測地図1918年  
 ・日本交通分県地図「其三十六」東京山梨1929年  
 ・東京及横浜復興地図（時事新報附録）1924年  
 ・大東京漫画地図（少女倶楽部臨時増刊附録）1932年  
 ・奥多摩山溪、秋川溪谷ハイキング地図1939年  
 ・身延山案内1931年頃  
 ・日本交通分県地図「其三十九」神奈川1930年  
 ・鎌倉江の島名所案内/1929年  
 ・横浜名所案内図絵 市街電車案内1921年  
 ・東京から日帰り名勝案内図絵1928年  
 ・東京湾近海海水浴場案内1929年頃  
 ・東京-仙台-青森-札幌1938年

【信越・北陸】

・日本交通分県地図「其二十七」長野1926年  
 ・日本八景上高地溪谷名所図絵1930年  
 ・日本交通分県地図「其四十一」新潟県1930年  
 ・佐渡旅行案内地図1929年  
 ・羽越温泉郷案内1956年頃  
 ・日本交通分県地図「其十三」富山1924年

- ・高岡市を中心とせる名所鳥瞰図 1935 年頃
- ・日本交通分県地図「其六」石川 1924 年
- ・和倉温泉案内 1927 年頃
- ・日本交通分県地図「其三十七」福井 1929 年
- ・三国芦原名勝案内 1932 年頃

#### 【東海】

- ・日本交通分県地図「其三」静岡 1923 年
  - ・大井川鉄道沿線名所図絵 1931 年頃
  - ・東海楽園熱海温泉遊覧案内 1927 年
  - ・日本交通分県地図「其十一」愛知 1924 年
  - ・瀬戸電鉄沿線図絵 1931 年頃
  - ・大名古屋市街全図（最新、丁目入）1942 年
  - ・明治用水地域図 1953 年
  - ・愛知県観光図 1960 年頃
  - ・知多新四国参拝案内 1965 年頃
  - ・日本交通分県地図「其二十五」岐阜 1926 年
  - ・陶都・多治見を中心とせる名所交通鳥瞰図 1929 年
  - ・岐阜市鳥瞰図 1936 年
  - ・日本八景木曾川名所図絵 1930 年
  - ・沿線御案内（名古屋鉄道）1940 年
  - ・中部日本観光鳥瞰図（新愛知附録）1937 年
- [Column\_2] 「日本八景」と吉田初三郎の鳥瞰図

#### 【近畿】

- ・日本交通分県地図「其五」三重県 1924 年
- ・津市を中心とせる名所交通鳥瞰図 1932 年頃
- ・赤目瀑 香落溪案内 1927 年頃
- ・新興の四日市 1936 年
- ・日本交通分県地図「其三十」滋賀 1927 年
- ・観光の長浜 1950 年頃
- ・天台宗総本山比叡山延暦寺鳥瞰図 1937 年頃
- ・日本交通分県地図「其四」京都 1924 年
- ・隠れたる名勝 宇治川の上流 琵琶湖の下流 1926 年頃
- ・京都名勝遊覧図 1929 年
- ・日本交通分県地図「其一」大阪 1923 年
- ・堺市鳥瞰図 1935 年
- ・大大阪観光地図 1936 年頃
- ・大鉄電車沿線案内 1936 年頃
- ・日本交通分県地図「其十七」兵庫県ノ一 1925 年
- ・日本交通分県地図「其十八」兵庫県ノ二 1925 年

- ・城崎温泉御案内 1927 年頃
- ・神戸市案内絵図 1931 年頃
- ・最新兵庫県鳥瞰図（大阪朝日新聞附録）1929 年
- ・日本交通分県地図「其十六」奈良 1925 年
- ・奈良名所俯瞰地図 1925 年
- ・日本交通分県地図「其十二」和歌山 1924 年
- ・紀州名所案内 1931 年頃
- ・霊跡高野山案内新図絵 1940 年頃
- ・沿線案内 南海電車 1955 年頃
- ・近畿名勝遊覧早わかり地図 1928 年
- ・阪和電鉄沿線名所案内図 1930 年頃
- ・京阪電車沿線名勝案内図 1933 年頃
- ・参宮急行電鉄沿線名所図会 1931 年頃
- ・最新交通遊覧案内地図 1934 年

#### 【中国】

- ・日本交通分県地図「其十」鳥取 1924 年
- ・日ノ丸バス観光案内図 1950 年頃
- ・日本交通分県地図「其二十三」島根 1925 年
- ・出雲大社案内 1929 年頃
- ・一畑電車とバス 1965 年頃
- ・日本交通分県地図「其三十一」岡山 1927 年
- ・井笠沿線を中心とせる備南名所交通図絵 1930 年頃
- ・岡山県の観光とハイキング 1960 年頃
- ・日本交通分県地図「其二」広島 1923 年
- ・備後三次町鳥瞰図 1931 年
- ・国立公園瀬戸内海の内 安芸の宮島 1955 年頃
- ・日本交通分県地図「其二十六」山口 1926 年
- ・再建山口市観光交通鳥瞰図 1950 年

#### 【四国】

- ・日本交通分県地図「其八」徳島 1924 年
- ・阿波遊覧図絵 1932 年
- ・日本交通分県地図「其三十五」香川 1929 年
- ・瀬戸内海国立公園 讃岐観光案内図 1950 年頃
- ・讃岐金刀比羅宮神域 1936 年
- ・日本交通分県地図「其二十二」愛媛 1925 年
- ・松山市鳥瞰図 1952 年頃
- ・日本交通分県地図「其三十四」高知 1929 年
- ・南国土佐観光交通案内 1960 年頃
- ・日本八景室戸岬名勝図絵 1930 年

- ・四国遍路道中図 1970 年頃
- ・大阪商船瀬戸内海航路図絵 1925 年
- 【九州・沖縄】
- ・日本交通分県地図「其二十八」福岡 1926 年
- ・福岡市内略図 1936 年頃
- ・九州鉄道沿線案内 1924 年
- ・日本交通分県地図「其二十九」佐賀 1926 年
- ・日本商工業別明細図之内 鳥栖市（他） 1955 年
- ・日本交通分県地図「其七」長崎 1924 年
- ・日本八景雲仙岳名所図絵／1930 年
- ・日本交通分県地図「其三十三」熊本 1928 年
- ・阿蘇登山案内図 1960 年頃
- ・観光の熊本 1955 年頃

- ・日本交通分県地図「其二十」大分 1925 年
- ・天下無二耶馬全溪の交通図絵 1926 年頃
- ・別府案内地獄めぐり 1960 年頃
- ・日本交通分県地図「其十四」宮崎 1924 年
- ・宮崎県観光案内図 1960 年頃
- ・日本交通分県地図「其三十八」鹿児島及沖縄 1930 年
- ・鹿児島市鳥瞰図 1935 年
- ・'71 最新那覇市街図 1971 年
- ・九州観光図絵（紀元二千六百年） 1940 年
- ・九州観光遊覧案内 1960 年頃
- ・日本を中心とせる世界の交通 1922 年頃

## カリブ海の孤島 — セイバ島

長谷川 秀樹（横浜国立大学教授）

セイバ島は「カリブ海オランダ」を構成する 1 つの島である。「カリブ海オランダ (Caribisch Nederland)」とは、オランダ海外領土の一地域で、カリブ海に位置する 3 島の総称である。各島の頭文字を取った「BES 群島」の別称がある。B はボネール (Bonaire) 島、E はステイシア (Sint Eustatius) 島、そして S が今回取り上げるセイバ (Saba) 島である。

この 3 島以外にオランダはカリブ海に 3 島を海外領土として有する。ステイシア・セイバの近くにあるシント・マルテン (セントマーチン島南部)、ボネール島近くベネズエラ沖に位置するアルバ島とキュラソ島である。2010 年までは、上記 6 島を包括する地域として「蘭領アンティル (Nederlandse Antillen)」という呼称が存在していたが、今はこの組織は存在せず、6 島それぞれが広大な自治権を有する状況である。現在の「カリブ海オランダ」は、警察機構などは BES3 島で統括されているものの、行政・司法・立法機構などは完全に別である。



地図 1 セイバ島の位置

地図出典：Laffoon, *et al.* p.352 に報告者が加筆した。

また、セイバ島を含め、カリブ海 6 島はすべて EU 域外である。6 島民は EU 市民権を有するものの、EU の共通政策は一切適用されず、また、ユーロも使用されない。「蘭領アンティル」時代には 6 島共通の通貨である「アンティルギルダー (NAF)」が使用されていたが、それが解体された現在では島で使用通貨が異なる。セイバ島、ステイシア島では基本 US ドルのみが流通している (シント・マールテンでは 2025 年よりカリブギルダー (XCG) が発行されているが、US ドルの方が流通している)。



画像 1 東側の海上から見たセイバ島

(報告者撮影 2025.11.28。以下の画像すべて同じ)



地図 2 セイバ島全図

地図出典: <https://fishing-app.gpsnauticalcharts.com/i-boating-fishing-web-app> をもとに作成。報告者が地名や道路等を加筆した。

自然・地形・気候について言えば、セイバ島は全体的に急峻な山塊で占められ、平地・平野が全くない。海岸線のほとんどが断崖絶壁である。集落は沿岸にはなくいずれも山岳内陸部に位置している。最高峰はシナリー (Scenery) 山で 878m。オランダ本国を含め同国の最高峰である。同山は島全体が成層火山の溶岩ドーム上であ



画像 2 断崖絶壁とフォートベイ港

り、島が一つの火山体をなしている。当海域は乾期と雨期の区別が明瞭なサバンナ気候であるが、同島は急峻な山岳で占められていることから内陸部では雨が多く、森林地帯で覆われている。以上から植生や動植物相は近隣の低平な島嶼とは大きく異なる。

面積は 13km<sup>2</sup>、直径が 5km と、日本で言えば瀬戸内海の大崎上島、五島列島の久賀島くらいの大きさで、人口は 2025 年時点で 2,100 人ほどで、同じ大きさの大崎上島の人口の 3 分の 1 程度、一方、過疎化に悩む

久賀島から見れば7倍の人口規模だが、セイバ島民は島内の4集落に集住し、島の大部分は山岳・森林地帯となっている。

また、上述の条件から荒々しくも大変豊かな自然に恵まれてもいる。特に断崖絶壁に囲まれた沿岸はほぼ全島周が手つかずの海岸であり、国際自然保護連合 (IUCN) カテゴリーII (国立公園) の「海洋公園」に指定され、さらにその中の特別保護区域 (SPAW) として全島海岸と沖合の幾つかの岩礁があわせて582ha指定されている。特に同島周辺海域は「サメの楽園」として知られ、ダイビングも盛んである。一方、そうした観光にもつながる活動と海域保全を周知する施設がフォートベイ港に置かれている。



画像3 エッジ社の高速双胴船 (フォートベイ港にて)

険しい地形を反映してか、港湾は1か所、島南西部のフォートベイのみで、小型船しか停泊できない。フォートベイの正反対となる島北東部に飛行場 (SAB) があり、定期便も就航しているが、滑走路が世界最短 (商用空港・飛行場として) の400mしかない。また飛行場や港から集落までの道路も狭く、急坂と急カーブが続く。



画像4・5 フォートベイ港からボトム集落まで続く急坂・急カーブの道路

定期航路は同じく蘭領のセントマーチン島との間に2社 (エッジ社、マカナ社)、ステイシア島との間に1社 (マカナ社) が運航しているが、いずれも高速双胴船であり、フェリーではない。定員は最大でも100人程度の小型船である。便数はセントマーチン島へは1日1~2往復、ステイシア島へは週5往復であり、利用者のほとんどが観光客で島民利用は少ない。料金が高く、セントマーチン島からは100ドル近くかかることも影響している。空路は、セントマーチン島から日に3~6往復あり、ローカル航空のウィンエアーが運航しているが、滑走路が短いことから、ジェット機はおろかATR-42等の中型ターボプロップ機すら就航できず、ドルニエ228やDHC6など定員20名以下の小型機のみである。

加えて、港と飛行場には、国境審査 (イミグレーション) が存在することだ。蘭領アンティルの6島はそれぞれ広範な自治権を有していることから、それぞれが政治行政的には、ほぼ「独立国」に等しい権限を有する。麻薬や密売の防止、動植物検疫の徹底が本来的な目的ではあるが、蘭領アンティル6島在住者以外の旅客は、施設は小さ



画像6 旅券に捺されたセイバ島の入国スタンプ



画像7 「首都」ボトム町（メインストリート）

いが入国審査を受けなければならない。離島時は旅券審査は行われませんが、航空で離島する場合は出島税（Departure tax）を支払わなければならない（船舶の場合は乗船料金に含まれている）。この税はセイバ島のみならず、蘭領アンティルをはじめ、小アンティル諸島のほぼすべてで導入されている。こうしたことが、同海域間での島嶼間交流の阻害要因にもなっていると考えられる。

因みに、同島民のパスポートはオランダのものに同一（蘭領アンティルのうち、アルバやキュラソは島独自のパスポート）だが、IDカード（国内身分証）は、セイバ独自のものとなっている。

同島には主に3つの集落、ボトム（The Bottom）、ウィンドワードサイド（Windwardside）、ザイオンズヒル（Zion's Hill）がある。いずれも沿岸ではなく、山塊の中腹部に立地している。これら3集落は、港と空港を結ぶ1本の道路で結ばれている。島内の公共交通と言えるものは、一応はセイバ島政府と観光局が公認した「タクシーバス」なるものがあるが、他の途上国等によくみられるトヨタハイエースの改造車両で、定員いっぱいになり次第随時運行されるもので、厳密には「公共交通」とは言い難い。港からボトム集落までは2km 足らずだが、12ドル\*と高額だ。

\*セイバ島観光局に公定料金表がある。ウェブサイト (<https://www.sabatourism.com/wp-content/uploads/2025/02/Taxi-Rate-Sheet-2025.pdf>) を参照。

今回は港に一番近いボトム集落を訪問した。ボトムはセイバ島の司法・立法・行政機構が集約する同島の「首都」であり、その他、警察や病院、大学、教会の司教座、電力会社本部など重要施設も置かれる。しかし、人口は500人程度で、日本的に言うならば、「町」よりは「村落」だ。

同島島嶼議会（Island Council of Saba/Eilandsraad Saba）は島民選挙により選出される5名の代議員により構成される。なお、議長は、この5名からではなく、中央政府（オランダ王国内務省）から派遣される Island Governor/Gezaghebber が務める。これは「島嶼知事」「島嶼長官」「島嶼主席」などの訳が考えられるが、ここは「島司」と書くのが妥当かもしれない。「島司」は、ボネール、ステイシア両島にもそれぞれ派遣され、その職務もセイバ島司にほぼ同じである。

島嶼議会とは別に執行評議会（Executive Council/Bestuurscollege）がある。こちらはセイ



画像8 セイバ島議会。同島旗も掲げられている。

バ島の対外関係を決める上での決定機関であり、「島司」が議長を主宰し、島嶼議会が指名する2名の評議員により組織運営される。

なお、セイバ議会・島司庁舎以外に、ボトムには Rijksvertegenwoordiger と称する政府施設もある Rijksdienst Caribisch Nederland という別称があり、これは「カリブ海オランダ庁」と訳せる。BSE3 島を統括する王国政府の機関で、法務や公安などの業務を監督する。



画像9 Rijksvertegenwoordiger

最後に、セイバ島自体のオランダにおける地位について言及する。島自体はオランダの憲法（第132a条）により Openbaar Lichaam と定められている。英語では Public Entity と表記されるもので、「公共団体」と訳される。セイバ島は3集落により自治体が分かれるのではなく、この「公共団体」が島内行政と島外関係業務を同時に担う（一部業務は、上述の「カリブ海オランダ庁」が執行する）という形である。セイバ島「政府」とも呼ばれるが正式には「公共団体」である。

このように、カリブ海オランダの島々は小さいながらも、独自の機能と権限、地位により、ガバナンスを保っていると言えるだろう。

#### 参考文献

Laffoon, J.E., *et al.*, (2018), The Life History of An Enslaved African: Multiple Isotope Evidence for Forced Childhood Migration from Africa to the Caribbean and Associated Dietary Change, *Archaeometry* 60-2, pp.350-365.

## 会員の動向（2025年11月～2026年3月）

1) 入会 ありません

2) 変更

【所属先の変更】

2156 TAVUTI Jamesly

(旧) 横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 (修了)

(新) Town Planning and Infrastructure Development Division, Port Vila City Council,

Republic of Vanuatu

3) 退会 3名

\*ニュースレターのウェブ公開に伴い、以降退会者については原則（在会中のご逝去等を除きます）人数のみの表示とします。

#### 4) 会員数掌握 (2026年3月1日現在、括弧は内数で女性会員)

正会員 180 (59) うち学生会員 16 (9)

準会員 10 (5)

賛助会員 2

総数 192 (64)

女性会員比率:  $64 / (192 - 3^{**}) \times 100 = 33.9\%$

\*\*性別ではない賛助会員2、「町長職」としての正会員1の計3を総数から差し引いています。

### 【お知らせ】 ニュースレターが学会ウェブサイトで公開されます

2026年3月5日に開催されました理事会において、本学会ニュースレターのオープンアクセス化が承認されました。今号(81号)より本学会ウェブサイトにてニュースレターを公開し、会員および会員外の皆様にもご覧いただけるようになります。これに伴ない、これまで行ってきました会員への個別のメール配信を次号(2026年7月20日発行予定の82号)より停止いたします。どうかご承知おきください。

### 『ニュースレター』の原稿を募集しています

日本島嶼学会では『ニュースレター(電子版)』を年に3回(7月、11月、3月)発行し、総会・理事会・研究大会に関する報告のほか、島嶼に関する諸情報や会員の動向、書評などを掲載しています。会員の皆さまから広く原稿を募集していますので、第82号(2026年7月20日頃に発行予定)への掲載を希望される方は、2026年7月10日までに原稿をお寄せください(送付先: [mizota64@gmail.com](mailto:mizota64@gmail.com) または [s.sawada@tokai.ac.jp](mailto:s.sawada@tokai.ac.jp))。会員の皆様からの情報のご提供をお待ちしています。

---

#### 日本島嶼学会ニュースレター 第81号

発行日 2026年3月20日 (次号は2026年7月発行予定)

編集者 溝田 浩二・澤田 成章

発行者 日本島嶼学会(事務局)

〒890-8580 鹿児島市郡元1-21-24

鹿児島大学 国際島嶼教育研究センター

大塚研究室

E-mail: [yotsuka@cpi.kagoshima-u.ac.jp](mailto:yotsuka@cpi.kagoshima-u.ac.jp)

学会ホームページ <http://islandstudies.jp/>

年会費 正会員 10,000円

準会員 5,000円

学生会員 3,000円

賛助会員 1口10,000円(5口以上)

郵便振替口座 01790-3-113215

(加入者名: 日本島嶼学会)

---